

厚生労働科学研究費補助金
(障害者対策総合研究事業(障害者政策総合研究事業(精神障害分野)))

(総括・分担)研究報告書

精神科入院患者の骨粗しょう症の現状と治療方法に関する研究

研究分担者 鈴木正孝 あいせい紀年病院副院長

研究要旨

前回の研究にて骨粗鬆症と診断された患者と新たに骨粗鬆症と診断した精神科入院患者に対して薬物治療を行い、その結果をもとに精神科患者の骨粗鬆症に対する効果的治療方法を検討する。

A. 研究目的

長期入院となりがちな精神科入院患者においての骨粗鬆症の状況の把握と効果的な治療方法を考案する。転倒と骨粗鬆症の関係を調査する。骨粗鬆症治療の効果について研究する。

B. 研究方法

前回研究で骨粗鬆症と診断された症例に対して、治療前後に新たに DEXA 骨密度と DIP 骨密度測定を行い、双方の結果の相関を求めるとともに、治療有用性を評価した。

骨代謝マーカーなどの変化も測定した。

骨粗鬆症治療は 31 例に行った。症例の大多数は統合失調症であった(31 例中 26 例)

- ・ 年齢は 49 歳から 80 歳(平均 69.7 歳)

- ・ 男 3 例、女 28 例。

- ・ 既に治療中の患者が 15 例、新たに治療開始が 16 例。

- ・ 新たに治療開始例はゾレドロン酸水和物(リクラスト®)が 15 例、治療中の症例は基本的に従来通りの治療としたが、3 例にゾレドロン酸水和物(リクラスト®)治療へ変更とした。

(倫理面への考慮)

当院の倫理委員会で当研究の審査を行い、許可を得た。

さらに骨粗鬆症検査と治療薬選択については個々に説明を行い、書面で承諾をした患者のみを対象とした。

C. 研究結果

骨密度の上昇に関してはゾレドロン酸投与後半年後の本年 2 月に再度骨密度測定を DEXA にて測定した。骨代謝マーカーについても測定した。

ゾレドロン酸水酸化物(リクラスト®)投与対象

- ・ 使用症例は 18 例(男 2 例、女 16 例)。
- ・ 年齢は 49 歳から 80 歳(平均 69.7 歳)。
- ・ DEXA 腰椎骨密度は%young で 41%から 131%(平均 67.1%)

- ・ 131%の症例はすでに治療中で骨密度が上昇、既存椎体骨折が多数ある症例。

- ・ 精神病り患年数は 1 年から 41 年(平均 19.7 年)。

- ・ 統合失調症が 15 例と大部分であり、他はうつ病 1 例、老年期うつ病 1 例、急性精神病 1 例であった。

副作用としては

- ・ 点滴静注後翌日の発熱が 18 例中 11 例に認められた。

- ・ 発熱した症例は 38 度から 39 度と比較的高熱であった。

- ・ 通常の熱発と異なり、発熱しても 11 例中 9 例は患者本人としてはほぼ無症状と感じており、ことに治療を要しなかったが、2 例は食思不振となりアセトアミノフェン(カロナール®)を使用した。

- ・ 発熱は無治療でも発熱後 1 日から 4 日で解熱し、以後ことに問題となるような副作用は認めなかった。

- ・ 点滴に 30 分を要するが、対象患者ではことに問題なく点滴可能であった。

- ・ 年一度の使用で治療可能であり、発熱をのぞけば大きな副作用はなく、精神科入院患者においても使用可能であった。

- ・ 半年後の骨密度は測定可能であった 12 例において(5 例は退院後施設に入所しており経過がおえなかった)11 例で骨密度上昇していた。12 例の平均骨密度は半年後に 80%から、90.6%に上昇していた。骨密度が低下した 1 例はそれまでイバンドロン酸での治療を行っていた症例であった。

- ・ ゾレドロン酸水和物は単独使用で骨密度を上昇させる効果があった。

D. 考察

骨粗鬆症治療に関してゾレドロン酸水和物は 1 回の投与で単独でも半年後には腰椎骨密度を上昇させる作用があった。年一度の点滴で有効な薬剤である可能性が高く、頻回投与が困難な精神科患者には有用な薬剤であることが考えられた。

骨密度低下患者と転倒の関係についてはアクシデント、インシデント報告に至った転倒について骨密度低下患者においてもことに転倒事故が多いということとはなかった。

現在までアクシデント報告がのべ14例、インシデント報告がのべ9例、合計のべ23例の報告があるが、骨密度低下患者の報告例はのべ5例であった。
転倒率は低骨密度患者46例中4例7.0%、正常患者157例中16例の10.2%であった(一人多数回転等を含む)。
骨粗鬆症治療により転倒が防止できるかの検討は次年度に行うこととなる予定。

E. 結論

精神科入院患者に対する骨粗鬆症の詳細な検討はほとんどない。治療に関する研究もほとんどない。本研究は今後精神科患者の骨粗鬆症治療に関する簡便で実際的な方針を明確に示すためおこなったが、現在のところゾレドロン酸水和物は年1回の点滴で併用薬がなくても骨密度上昇が期待でき、頻回治療が困難な精神科患者においては有用な薬剤と考えられた。点滴時の発熱が高率に発生したが、入院患者のため対応は困難ではなく今後も治療継続できると思われる。
行政的意義においても精神科患者が高齢化するにつれ、転倒や脆弱性骨折の発生頻度は高く医療経済的にも有効な研究であると考えられる。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

